

学生のページ

英国短期留学(医学教育振興財団主催)報告

(於：ロンドン大学セントジョージ校)

(期間：2012年3月5日～3月30日)

よしおか まりな
吉岡 万里奈 (医学部第6学年)

形成外科での4週間は朝7時半から医局会、病棟回診、手術という毎日だった。

ロンドンの病院にはいろいろな国籍の人がいて、日本から来た私は珍しくなく、英語を話せることは当然で、初日から容赦なく質問され、答えが分からず恥ずかしい思いをした。日本との違いはきりが無い程あったが、共通していることもあった。それは求められている医師像である。医師間の関係は国や文化によって違っていても、患者さんと医師の関係は、人を相手にしているということで共通している所が多かった。

この留学で学問的なことはもちろん、日本の良さ、母校の誇れるところ、家族や友達が近くにいない生活での自分自身のこと、本当にしたいことがよく分かった。また、留学は一人でするものだと思っていたが、無事終えられたのはチャンスをくださった金沢医科大学の先生方、一年間支え続けてくださった国際交流課の方、私のどんな夢もいつも笑顔で応援してくれる家族のおかげであり、本当に心から感謝の気持ちを伝えたい。

私は医師として、女性としての夢がたくさんある。夢をいっぱい持てることは、身体が健康であるからというのも大きいと思う。今回、夢だった留学を叶えてくださった全ての先生方、留学中お世話になった人たちへの感謝の気持ちを忘れずに、私も、将来一人でも多くの患者さんが、一つでも多くの「夢」を叶えて、笑顔でいられるようにサポートしていきたい。



形成外科手術室での研修。右から2人目が筆者

バーモント大学春期医学研修報告

(期間：2012年3月12日～3月23日)

うえだ ようこ なかじま くみえ みずたに さくらこ
上田 陽子、中島 久美絵、水谷 桜子、
なす えりこ しんたに あかり
那須 栄里子、新谷 明里 (医学部第6学年)

主な研修内容は、講義の聴講、外来と救急の見学、内視鏡検査の見学、病理部での実習、外科手術の見学など多彩で、アメリカと日本の医療の違いを随所で体験することができました。外来診察では、患者が待機している部屋に医師が入ってきます。医師がマイクに向かって話し、それを別室の人がカルテに記録するので、患者の話をよく聞くことができます。一人あたり30分以上かけて話を聞き、コミュニケーションがよくとれていると思いました。内視鏡検査の見学では、医師の患者への接し方が非常に勉強になりました。分かりやすく、時には冗談を交えて説明しながら手技を行うという状況が、新鮮に思えました。手術見学で特に印象的だったのは、助手が操作をするたびに担当医が褒めることでした。ところで、西洋医学は、それぞれの問題点に対し局所的に治療を施すというイメージがありましたが、アメリカの医療を見聞して、全身を診察して体全体のしくみのなかで病態を考えることの大切さがわかりました。東洋医学と西洋医学には、想像以上に共通点が多いと強く感じました。

研修中は、英語が全然聞き取れなかったり、言いたいことが言えなくて悔しい思いもしました。話す人のトーンや速さが違ったり、訛りがあったりすると、慣れてきてもなかなか聞き取れませんでした。これからの英語学習ではリスニングに加え、言いたいことを書きとめるといった勉強法を実践していきたいと思います。



研修修了書を医学部長より授与される。後列左から中島、新谷、木田教授、那須、前列左から上田、水谷

学生のページ

マーサ大学医学研修報告

(期間：2012年3月12日～3月23日)

さきむら ゆうすけ しみず あい
 崎村 祐介、清水 愛 (医学部第6学年)

研修病院はマーサ大学の2つの Teaching Hospital でした。両施設ともセーフティーネット病院に指定されており、Level 1 Traumatic ER をもち、地域のプライマリーケアからホスピスまで幅広い医療を提供しています。研修では、家庭医学、内科、小児科(崎村)、神経内科(清水)、新生児科、救急、一般外科、産婦人科などをローテートしました。両医療センターでは学生に対してレジデントが教育し、レジデントに対しては上級医が指導する「屋根瓦式」の教育体制が確立されていました。日本と大きく異なると感じたのは、レジデントが学生に対してまず手技、問診をやらせてみる、そして問題点を指摘し、改善するにはどうしたらいいのか考えさせ、次の機会に活かすといったサイクルができていたことでした。

滞在中に、卒業後の研修先が決まるマッチングデーがありました。そのこともあって、自分の将来について熱く語る学生が多く、生き生きと目標に向かって進んでいる彼らの姿はとても誇らしげで、感銘を受けました。また、総じてアメリカの学生は「大人」であるという印象を受けました。それには進路選択や USMLE の受験タイミングなど、あらゆることを自分の責任で行える環境にあることや、実習でも医師と学生の立場が「同じチームの一員」であり、互いを尊重し合うような役割分担になっていることが関係しているように感じました。



Hoskins Center for Biomedical Research 前で。
 左から清水、生理学 Thompson 教授、崎村

ハワイ大学医学部研修報告

(期間：2012年3月5日～3月30日)

もりかわ
 森川 さつき (医学部第6学年)

研修参加の目的は、アメリカの医療体制や医師と患者との関係のあり方を学ぶためです。私には将来海外で医療を行いたいという夢があります。

第1週は Dr. Tokeshi のクリニックで、ファミリープラクティスを研修しました。入院が必要となった患者さんは開業医が契約している病院に入院しますが、主治医はその開業医が担当するので、治療方針の変更や退院の許可などの最終決定権は継続されます。実習中は、大学附属 Kuakini 病院に入院した患者さんをフォローしました。午前2時半に一人回診を始めます。6時半に先生と合流し、8時にはクリニックに向かい外来診察を開始します。クリニックが終わったら再び夜の回診です。Dr. Tokeshi から、「患者さんは最高の先生であることを忘れない」など、医師としての謙虚な心構えや姿勢を教わりました。

第2～4週、Kuakini 病院でチーム医療の実習をしました。大学3年生、研修1年目のインターン、3年目のレジデントの計3人のチームに加わりました。日本から来た何もできない学生を笑顔で迎え入れてくださった患者さん、優しく丁寧に指導くださった先生方との出会いと経験が、この研修を通しての一番の成果であり宝物です。また、ハワイ大学の学生はモチベーションが高く、やる気に満ちあふれていることを感じました。何年たってもこの衝撃、感動、感謝の気持ちを思い出しながら、医師としての道を歩みたいと思います。



クアキニ・メディカルセンターにて、メディカルチームと。
 左から筆者、研修医の Dr. Morris、医学生 Luella さん

学生のページ

テキサスA & M大学医学研修報告

(期間：2012年3月19日～3月30日)

きのした かおり はしもと まさゆき くりはら こうき
木下 香織、橋本 昌之、栗原 甲妃
(医学部第6学年)

研修は主として、臨床実習で各科をローテーションしている3、4年生のホストチューデントやレジデントのシャドウイングです。学生たちは、指導係の医師におおむね一対一でついていて、毎日その職場のある病院やクリニックに直接出向きます。私たちは、「先生についている学生」についている留学生」という身分になります。

いろいろなことに驚かされました。スペイン語しか話せない患者さんのために、通訳が来るという場面に何回も遭遇しました。問診を終えた学生に、指導医が患者さんの目の色をきいていました。これは、アイコンタクトがとれているかの確認で、多民族国家ならではの質問です。また、ある患者さんの胸部・腹部のX線を見ると、全体が真っ白でした。すべてが脂肪。日本ではまず見かけない画像でした。しかし、本当に驚いたのは、学生たちの臨床能力の高さです。身体所見や神経所見のとりかたが鮮やかで、しっかりした能力と自信を、第3学年の学生がすでに身につけているのです。

自律的な学生たちの高い臨床能力と、それを活かして磨くための実習現場。日本では普段決して見ることのない多人種、多文化、多言語、多国籍環境下の医療現場と、そこで繰り広げられる多様で刺激的なコミュニケーションの数々。実に充実したこの二週間に見聞きし、学び、思い、考えたことは、これからも1分1秒も漏らさず記憶し反芻していくであろうことを確信します。



シミュレーションセンターにて心音のシミュレータ“Mr.Havie”と。
左から栗原、木下、橋本

マクデブルク大学医学研修報告

(期間：2012年3月19日～3月30日)

さわぐち じゅん
澤口 潤(医学部第6学年)

ドイツザクセン州マクデブルク市にある Otto-von-Guericke 大学(マクデブルク大学)で2週間、医学研修をさせていただきました。医師となつてからの本格的な医学留学を希望しているため、その第一歩ともなる経験をさせていただいた関係者の皆様に大変感謝しております。

胸部外科で1週間、病理学で1週間研修しました。行く前は多くの不安もありましたが、現地に到着してしまえばあっという間の2週間でした。研修内容は、胸部外科では手術への参加と術後管理、病理学では剖検への参加と標本の考察などと、本学で行われているBSL、CCSと大きな違いはありませんでした。ただドイツ語が話せないのが、患者さん、医療スタッフとコミュニケーションをとることができませんでした。この点が胸部外科1週間を通して最も辛い点でした。現地言語が留学の際にいかに大切であるかを改めて思い知らされました。

日本医学がかつてドイツ医学を基に作られたためか、ドイツと日本の医学や医師には共通する点がたくさんありました。その一方で、異なる点もそれ以上に多く、ドイツの病院に2週間身を置くということだけでも、ヨーロッパの医学を肌で感じる貴重な経験となりました。そして何より、一人で異国の病院に赴いたということが大きな自信となりました。この2週間の経験を活かし、今後も自分の目標を達成できるよう日々精進していきたいと思っています。



Gademann教授宅にて。左から医学部国際交流担当スタッフ Stefani Sasaki-Sellmerさん夫妻、筆者、国際交流担当主任 Gademann教授